

貫井の風

令和5年度 2月号

NO. 10

練馬区立貫井中学校 学校だより

「ならぬことはならぬものです」

校長 桐野 和之

江戸時代に会津藩と呼ばれている地域がありました。今で言うと、福島県に位置するあたりです。会津藩では、10歳になると日新館という、現在の学校のようなところに入って学問や武芸を習うことになっていました。まだ、日新館には入れない6歳から9歳くらいの小さな子どもたちは、自分たちの町に子どもたちだけで集まりをつくっていました。その集まりの事を什（じゅう）と言ったそうです。什というのは、10人組とか10軒の組という意味がありますが、10人ぐらゐの子どもが集まった遊び仲間のようなものと考えると、たぶんわかりやすいのではないかと思います。会津藩の子どもたちは皆、町ごとにつくっている「什」に必ず入らなければなりませんでした。

さて、什ではどのようなことをしていたかという、まず、一番年上の者が什長（じゅうちょう）になり、什長は午後の集団遊びの前に、お話をすることになっていたそうです。そのお話の内容は、

- 一、年長者の言うことには背いてはならませぬ
- 一、年長者にはお辞儀をしなければならませぬ
- 一、うそを言うことはならませぬ
- 一、卑怯なふるまいはしてはならませぬ
- 一、弱い者はいじめてはならませぬ
- 一、戸外でものを食べてはならませぬ



というような内容で、どの町の「什の掟」も必ず最後は「ならぬことはならぬものです」という言葉で締めくくられていたそうです。そして、この「什の掟」を守らなかった場合は、親とともに仲間にお詫びをしなければならなかったそうです。たとえお詫びをしても、改心した様子が見られない場合は、「ならぬことはならぬものです」と決して許してもらえなかったということです。「ならぬことはならぬものです」という言葉には、人として生きるためには、理屈や言い訳が通らない絶対にやってはいけないことがあるという意味が込められています。礼儀がないこと、うそをつくこと、弱い者いじめをすることなどは、人間として恥ずかしいことだと戒められていたのです。会津藩の子どもたちは、「什の掟」を大人から言われてつくったわけではありません。子どもたちで掟をつくって実行していたのです。ところで、皆さんは、物事を判断したり、行動したりするとき、自分の基準をもっていますか。会津藩の子どもたちのように、「嘘をつかない」という基準をもっている人もいることでしょう。あるいは、「自分がされて嫌なことは人に決してしない」という基準をもっている人もいるかもしれません。基準はその人によってまちまちです。けれども、何よりも大切なことは、自分の基準が周囲の人を楽しく幸せな気持ちにし、自分をも高めるような基準になっているかどうかということです。そのような基準を皆さん一人一人がしっかりともち、その基準を破りそうになった時は、「ならぬことはならぬものです」と自分自身を押さえられるようになることが、とても大切です。皆さんはこれから多くの人とかかわりながら生きていきます。ですから、いつも物事が自分の思うとおりにいくとは限りません。どのような時であっても、周囲の人のことを考え、我慢すべきときは我慢し、友達と心を通わせながら楽しい日々を過ごしてほしいと思います。

「たかが給食、されど給食」

栄養士 木澤 祐子

いつも学校給食にご協力いただきまして誠にありがとうございます。この度校長先生より「給食への熱い想い」を皆さんにお伝えする機会をいただきました。「たかが給食、されど給食」という想いをぜひ皆さんにお伝えできたらと思います。

栄養士の立場から「生徒たちの学校給食摂取基準量を満たす」等々は当然として、それ以外でいつも気に掛けていることがいくつかあります。

まずは「季節感を大切にする」。旬の野菜や食材を使用するのはもちろんのこと、季節の行事や年中行事を意識して献立を立てています。1月でいうと「正月・鏡開き・七草・小正月・小寒・大寒」といったところでしょうか。何気なく過ぎてしまう毎日ですが、季節の変化を給食からも気付いて欲しいという願いを込めています。



また、毎月 19 日には「食育の日」として、各地の郷土料理を取り入れています。日本国内だけでなく、海外の料理も紹介し、日本の伝統の味を知ってもらうとともに、世界にも目を向ける一因になればと思っています。

そして「地産地消」です。練馬区では色々な種類の野菜が採れます。SDGs の観点からも、地球にも経済にも、そして美味しさという点においても、地産地消は欠かせません。

「経済」と書きましたが、給食は皆さんから頂戴している給食費で賄っています。いただいたお金の中でいかにバラエティ豊かなメニューにするか（＝コストパフォーマンス）も大きな課題だと思っています。

生徒たちにこんなメニューを食べてほしい、給食が楽しみで学校に来てほしい、月曜日や連休明けはみんなに人気のあるメニューがいいかな？この調理法なら前回よりはもっと食べてくれるかな？などなど、様々な想いを持って献立を立てています。

その想いを、予算や給食室の設備状況（釜の数や人員数）、調理時間などを考慮して組み立てていきます。メニューの組み合わせによっては出来ないといったことも多々あります。練馬区では使ってはいけない食材や、週 3.8 回以上は米飯給食にしなければいけない、といった制限もあります。

毎月、出来上がった献立を校長先生に確認していただく時や、皆さんに献立表を配る時は、本当にドキドキします。その完成した献立を、プロの調理員さんたちが美味しく仕上げてくださっています。

生徒の皆さんが美味しいと食べてくれる毎日が続くよう、また、安心安全な給食が提供できるよう、これからも努めていきたいと思っています。

限られた中学時代の給食が、楽しい思い出の時間となりますように。

私の勉強法 ～シリーズ②～

英語科教諭 八田 大空

今回、この原稿依頼をいただいたときに正直ドキッとしました。なぜなら、私が中学生の時と今とでは求められていることが大きく違うからです。私は、中学校に在学時は、地域の硬式野球チームに所属し、日々野球に打ち込んでおり、勉強が得意といったわけではありませんでした。野球中心の生活だったために日々学習するという習慣がなく、試験前に振り返りをするようなやり方でした。それでは中々力が付かなかったので、コツコツやれば良かったなと後悔しています。英語も決してできるわけではありませんでした。しかし、英語に関してはずっと興味があ



りました。なぜなら英語がペラペラ話せたらカッコいいと思っていたからです。英語力を高めるために洋画を英語で見たり、洋楽を聞いたりし続けました。もちろん、メジャーリーグの試合を英語実況で見たりしました。常に英語に触れる習慣が中学生の頃にできました。それでも英語ができたわけではありませんが……。もちろん英語のワークを解いたり、ノートを書いたりすることも大切なことですが、それ以上に英語に興味をもつことが一番大切なことです。英語は、他の教科と違って自分の趣味と英語を合わせて学ぶことができます。これまでこのようにしてペラペラに話せるようになっている人たちもたくさんいました。中学生の頃は英語が苦手でも日々英語に触れていれば一気に伸びる可能性があります。あきらめずにがんばれ！！

理科教諭 松田 大哉

私は小学校の時から理科が好きでした。理由は勉強した分だけ点数が取れたからです。いわゆる得意教科でした。もちろん私にも苦手教科はあり、英語は聴くだけで頭が痛くなるし、国語は行間を読むといわれても、書いてないものをどのように読めばいいのかと思っていました。今思い返してみれば、理科は自分なりの学習方法があったから得意教科だったのかもしれませんが。



「理科は暗記科目だ」とよく言われます。確かに、元素記号など暗記しなければ解答のスタートラインに立つことができないものはあります。しかし、全て丸暗記していたら覚えることが多く、頭がパンクしてしまいます（私は暗記することが苦手ですし……）。そこで私は、暗記する内容を減らすために、「働きと構造」は結びつけて理解することを意識していました。「働きと構造」は密接に結びついているのです。例えば、小腸は食物の養分を吸収する部分であり、小腸の内側の壁は柔毛という突起物で覆われていることを覚えるとしめます。このまま覚えるならば、「小腸は養分を吸収する」と「小腸の壁は柔毛で覆われている」と2つの事柄を覚える必要があります。しかし、柔毛は表面積を広げることで養分の吸収をしやすくするという「働き」があり、この柔毛の構造と小腸の働きを結びつけて覚えることで、上記の「小腸は養分を吸収する」と「小腸の壁は柔毛で覆われている」をまとめて覚えられるのではないのでしょうか？このように覚えるためには、「なぜこんな構造をしているのか」といったように、学んだことに疑問を持つことが大事だと考えています。ぜひ理科が苦手だと思う人こそ「働きと構造」を結びつけて覚えられると、覚えることが少なくなるかもしれませんね。

最後に、理科は「分からなくて当たり前」です。科学者も分からないことがあるから研究するのです。私も分からないことだらけです。理科は「分からないことが多いから難しい」と考えるのではなく、分からないことが出てきたら、「新しいことを知るチャンス」と考えたり、分からないことが分かったときの爽快感を楽しんだりできると、理科が少しは好きになれるかなと思います。一緒に頑張りましょう！

3年生 美術授業 1/24 (水)

3年生の美術の授業で地域の和菓子職人さんをお招きして、造形的な特徴を捉えた作品作りとして「季節を楽しむ和菓子づくり」に臨みました。

生徒たちは授業で職人さんの製作実演を見ながら、どのように和菓子がつくられていくのか理解することに注力しました。

特に和菓子の形の作り方、色の組み合わせ方、細部の形を作る方法などに着目しながら作業のようすをじっくりと観察させてもらいました。

また、目で見て（視覚）、舌で味わって（味覚）、匂いを嗅いで（嗅



覚)、音を感じて(聴覚)、指触りや舌触り(触覚)などの五感を最大限に生かしながら、実際の和菓子を授業の最後には味わいながら作品の構想を練る取組を行いました。さて、どのような作品がこれからできあがっていくのか。今から楽しい授業になりました。



2年生スキー移動教室 2/3(土)～2/5(月)

2年生が楽しみにしていたスキー移動教室(軽井沢方面)が終わりました。交通事故や大雪により往復で交通渋滞の影響を受けましたが、スキー場や宿舎内での生活は快適に過ごすことができました。

初日。予定時刻より少し早くバスは出発しました。ただ、事故渋滞で予定より1時間20分も到着が遅れ、スキー実習の時間が40分程度になってしまいました。それでもスキーインストラクターさんの指導の下、元気にスキー実習に取り組みました。宿舎内では食事もしっかり摂り、自由時間も満喫しました。

2日目。前日の不足分を取り返すようにスキー実習。グループによっては少しずつゲレンデへ出て行きました。生徒たちはグループのスキルに応じた実習に一生懸命に取り組みました。スキーインストラクターさんたちの指導は大変丁寧です。スキーが初めての生徒たちも徐々にですが、滑る事ができるようになっていきました。しかし、スキー場は寒い。気温は零下。東京ではなかなか経験できない寒さを生徒たちは体感しました。それにしてもスキー実習後のお汁粉は美味しかった。

3日目。天気予報では昼過ぎから雪の予報でしたが、スキー場に到着するとやや強い勢いで雪が舞っていました。スキー場の人たちも「あれっ、予報より早い降りだな」のひと言。これが後に緊急事態になるとは・・・。スキー実習はどのグループもゲレンデでの滑走。雪の中、転ばないように列をなして滑降していました。時間はあっという間に過ぎ、実習が終了し、閉校式を終えて宿舎へ戻りました。

スキーウェアの整理、部屋の清掃をして食事の準備に入ろうとしているところにバス会社の方が大慌てでやって来ました。

「先生、すぐに出発しないと高速が封鎖されてしまう」と伝えられ、出発を急ぐ事にしました。すぐに食事を済ませ、宿舎での閉園式を中止にして出発。その後は長いバスでの行程。練馬につながる高速道路は午後3時に封鎖され、バスは一般道を進む事になりました。道路はどこも渋滞。それでもバス会社の方々が空いている道を探してバスを進め、22時過ぎに練馬に到着しました。一時は延泊も視野に入れましたが何とかその日のうちに帰着できました。バス内で生徒たちはレクリエーションや映画・アニメのDVDを楽しみながら時間を過ごしていました。生徒たちが「偉いな!」と思ったのは、お土産を買う時間がなくなったり、お腹が空いたりするなど、バス内で想定外の長い時間を過ごしても文句を言わず、和やかにしていた事です。ご家庭の皆さまには大変ご心配をおかけしましたが、子どもたちの「素晴らしい人間性」を垣間見る事ができ、逆に嬉しかったです。「2年生は大変良く過ごしていたよ!」と言いたいです。

